

令和2年度教育事業 ぼうさいトレーニングキャンプ

1. ねらい

- ① 不自由な生活体験を提供し、非常時における生活のシミュレーションをする
- ② へこたれない力（レジリエンス能力）を育てる
- ③ 自主的、自発的な学びの力を育む

2. 実施日

令和3年2月6日(土)～7日(日) 1泊2日

3. 対象者

小学校3～6年生

4. 参加者 / 申込人数

12名 / 16名

5. 講師

大西 琢也 氏

(NPO法人森の遊学舎代表理事、防災士)

6. プログラム (要約)

自然の家に滞在中に、大地震が起こり、もう一泊を自然の家のプレイホールで過ごさなければならなくなったというストーリーで、プログラムを開始。

プレイホールにテントを設営し、各個人の寝床を作り、寒さをしのぐための防寒対策を施す等、自分たちで考え、時間の過ごし方も含めて自分たちで話し合い、判断するような内容で進めた。

スケジュール

6日(土)	はじまりの会 オリエンテーション(ねらいの説明) 炊き出し体験(昼食) テント設営(寝床づくり) 防災食体験(夕食) たき火・あそびの時間 就寝
7日(日)	起床 防災食体験(朝食) 片付け 防災ワークショップ 終わりの会

2月6日(土)【1日目】

今回は学習の要素が多いキャンプ。ふだん自然の家に来ている子どもたちの様子よりも、少し緊張感のある雰囲気です。「はじまりの会」がスタートした。「今回は大変なキャンプになると思いますが」という所長あいさつに笑顔で反応する参加者たち。オリエンテーションでは南海トラフ地震のシミュレーション映像を真剣に見ている者もいた。

オリエンテーションで、今回のねらいが伝えられ、そ

の後、講師の大西氏が行った趣旨説明も兼ねたアイスブレイクを体験したあとは、張り詰めていた気持ちもほぐれ、学びつつ楽しもうという雰囲気になっていった。

昼食後、さっそく説明を受け、自分たちがひと晩過ご



す寝床づくりを行う。寒さをどうしのぐかがテーマ。倉庫の中にある物も自由に使ってよいと言われたあたりから、子どもたちの独創的な活動が始まった。



段ボールやスポーツ用具を活用してできた寝床はとても立派で、避難生活を少しでも工夫しようという遊び心が見て取れた。途中で講師が声をかけ、全員でテントを見回った。工夫すべきポイントなどを講師がアドバイスした。



カセットコンロを使って湯を沸かし、防災食（アルファ化米）の夕食を食べる時間になると辺りは暗くなる。停電（という設定）なので当然灯りはつかず、支給された電池ランタンだけでの生活となる。



講師から暖を取る方法としてたき火の提案があった。様々な火おこしの方法を熟知している講師による、きりもみ式での火おこしの実演があり、暗闇の中であつという間に火をつけてしまうその技術に参加者はとても驚いていた。

その後は、たき火で暖を取ったり、プレイホールの中のテント周辺で過ごしたり、暗闇を怖がることなく就寝時間までの時間を過ごした。

2月7日（日）【2日目】

暗いのでなかなかトイレに行けなかったという声はあったが、何とか無事に朝を迎える。「寒かった」という声が多かった。朝食は火をおこして、ホットドッグを焼く。昨日の火おこしの話を参考にしながら、楽しそうにたき木を森の中から集めてくる参加者。夜もそうだったが、朝も配給された食材を自分たちで調理する。「自分でやる」という意識が身についてきたようだ。



朝食を終えて、避難生活シミュレーションは終了。片づけをして、ふりかえりの時間とした。

参加者一人ひとり、感想を述べた。「電気がないって、とっても不便」「寒かったから、夜、何度も目が覚めた」「暗くてトイレに行くのが怖かった」「地震が起きたときにどうしたら良いかがわかった」という声が聞かれた。グループでの話し合いでは、本当に地震が来たらどうする？というテーマで協議した。大変だった、楽しかったという声のほかにも、「テントの立て方がわかったので、困っている人がいたら助けてあげたい」「一人だと怖かったけど、みんなで協力すれば楽しくできる」という頼もしいコメントがあった。

講師によるワークショップでは、自助、公助とともに互助が大切という話や、避難所では下着に苦勞するという話から、タオルを使ったふんどしづくりを体験した。最後に、講師が述べた、ふだんから「生き物として生きる」ことが防災意識を高めるうえでも大切という話が印象的であった。



7. まとめ

参加者は、実際に体験してみることで災害を「自分ごと」としてとらえられるようになったと感じた。「ご飯は嫌いなものでも食べられるときに食べる」という参加者の感想がとても印象的だった。身に染みて感じる事ができたのだと思う。広域防災補完拠点として、人材育成の立場から今後どのような取組を進めていくべきか、施設としての在り方を考えていきたい。

（企画指導専門職 高瀬 宏樹）